

八王子界限の今昔

私が高校生だった頃、八王子付近に近づく、桑の木畑が点在し、あちらこちらからパタンパタンという音が聞こえてきたものでした。現在の八王子は皆さんがよくご存じでしょう。今回はそんな町、八王子を中心に探訪することとしました。

「桑都」八王子

八王子の町は、地図で見るとおりとても広い（一万八千平方キロメートル）ことがわかります。北はあきる野市、南は町田市と相模原市、東は日野市、西は陣馬山を境としています。市内には高尾山があり、八王子は今や大学の町、学園都市となっています。「桑の都」という名の起こりは、平安の末頃、西行法師が諸国巡行の折、この辺りで「浅川を渡れば富士の影清く桑の都に青嵐吹く」と詠まれたことによるそうです。



▲ 八王子市地図

八王子の歴史

武蔵国分寺が造営された頃の八王子はまだ農耕が中心でしたが、国分寺造営のため、御殿峠を中心とした地域では屋根にのせる瓦の生産がおきました。北条氏康の二男、氏照が滝山城を引き継ぎますが、元亀元年（一五七〇）ころから、八王子城の築城をはじめ、居城をここに移しました。

天正十八年（一五九〇）、八王子城の城主北条氏照は前田利家、上杉景勝らの手勢によって攻め滅ぼされます。これを機に、城下町としての横山、八幡、八日市の三宿は消滅しますが、この三宿は、もと北条家の家臣であった長田作左衛門等の手によって今の横山あたりに宿を移しますが、浅川沿いにひろがる茫洋とした荒野原でした。

徳川家康が江戸に開幕して、街道の整備を行いました。配下の大久保長

安らの手によってほぼ現在の場所に、本格的な新しい町並みが築かれます。十五宿ともいわれる八王子宿も築かれます。また、江戸時代から織物の産地、絹布絹糸の集積地として繁栄してきました。

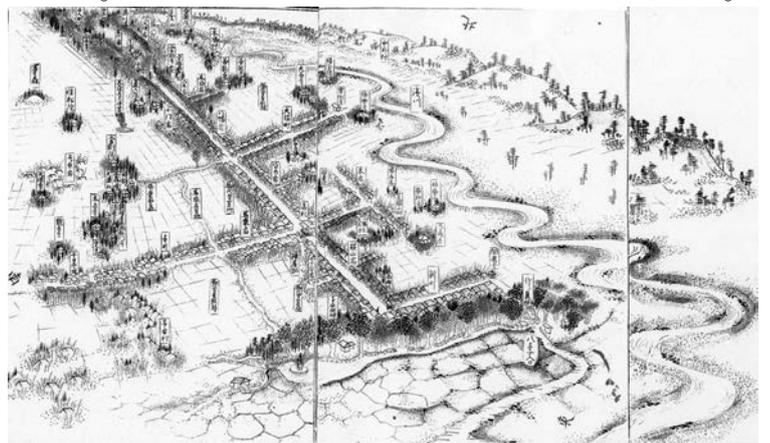
明治四年（一八七二）の廃藩置県によって、八王子は江戸幕府の直轄領や旗本領から神奈川県に編入されました。

馬車による街道交通が主だった明治十六年当時、人口は甲州街道、青梅街道沿いに集中しており、特に甲州街道の重要な宿場にして織物の町だった八王子の人口は二万人でした。明治二十二年に市町村制が施行され、一町・一宿・十八カ村による南

多摩郡が誕生しました。明治二十六年四月一日に八王子を含む三多摩地域が神奈川県から東京府に移管されました。この年、町内の中心部七百五十戸を焼失した「新万火事」が発生しました。明治三十年には、「八王子大火」で全戸数の半分以上にあたる三千三百四十一戸を焼失、四十二名もの死者を出しました。

明治三十四年に中央線は上野原まで開通し、浅川駅（現在の高尾駅）が開設され、八王子駅もこの時、元子安（現在の明神町）から子安（現在の旭町）に移転されました。さらに、明治三十六年に中央線の八王子～甲府間が、明治四十一年には八王子～東神奈川間の横浜鉄道（現在のJR横浜線）が開通しています。

大正六年九月一日に市制が施行された時の人口は四万二千四十三人でした。大正十二年の関東大震災では全壊十一戸、半壊二十戸、死傷者二十九名、行方不明五名の被害に留まっています。大正十四年には、玉南電気鉄道（現在



▲ 八王子15宿 文政5年(1822)

の京王帝都線)の東八王子(府中間が開通しました。

昭和十六年に小宮町が編入されました。昭和二十年八月二日未明、百六十九機のB29が、焼夷弾や爆弾を相次いで投下し、市内は一瞬のうちに火の海と化してしまい、都市としての生活機能は壊滅状態となりました。

昭和二十一年に、戦災都市復興計画が決まり、八王子駅周辺から新しい町づくりが始まりました。昭和二十二年の人口は七万二千九百四十七人でした。

昭和三十年に横山・元八王子・恩方・川口・加住・由井村を編入し、人口十三万七千九百六十六人、昭和三十四年に浅川町、昭和三十九年に由木村が編入され、人口十九万三千三百四十六人となりました。

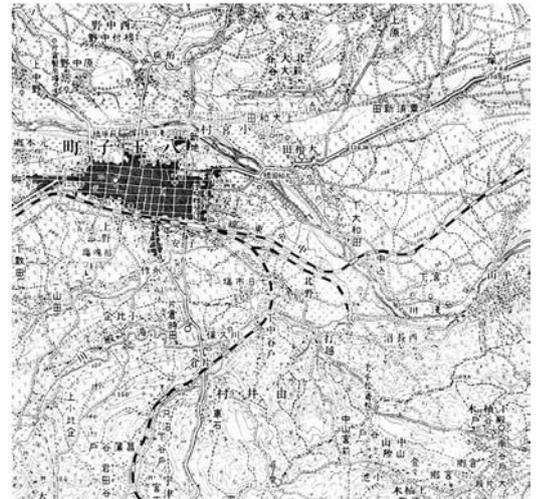
織物と八王子

八王子では絹がいつ頃から扱われていたのかを調べてみますと、延喜式に平安時代、武蔵国では、生糸や絹を租税として納めていたことが記されています。

正保二年(一六四五)に開板された俳論書「毛吹草」には武蔵国の特産物として「滝山横山嶋」があり、紬嶋が八王子織物の特産物であったことがわかり、このころ絹ではないにしろ織物が行われていたことがわかりました。

享保(一七一六)ごろから養蚕が活発になり、相模、八王子、青梅で紺や茶の上田島を、また八王子に袴地の「八王子平」があったこと、八王子で鳶色、黄茶など黄八丈に似た紬島が織られていたことが江戸時代中期(享保)に発行された「万金産業袋(まんきんすぎわいぶくろ)」に記載されています。

天保十四年(一八四三)八王子宿中野村で、農民が撚糸(水車による糸繰)を業として始めました。



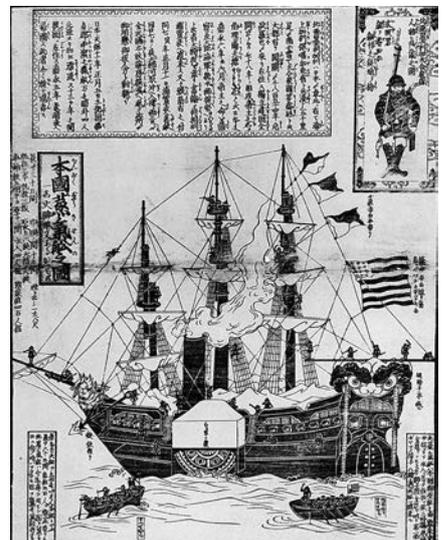
▲ 明治40年頃の八王子

ペリー来航

嘉永六年(一八五三)川柳に「上喜撰たつた四杯で夜もねむれず」と詠われた、ペリーの黒船来航がもたらしたものは横浜開港でした。

横浜が開港し貿易が盛んになると、輸出品として生糸(絹糸)が主力となりました。

横浜から輸出されていた生糸は万延元年(一八六〇)には七十七万斤、元治元年(一八六四)では百二十七万斤もあり、これらの生糸は関東一円から集められました。元禄五年(一六九二)頃には信濃・上野・下野・武蔵・相模・岩代六カ国の絹織物の流通の結節点となっていた八王子も天明初期(一七八一)の取引市場としては五日市・青梅市・新町市などと同等でした。しかし、天保十四年(一八四三)頃には西陣・桐生と並ぶ主要産地となっていました。このころの生糸を扱っていた商人は、四十九件あり小比企・鍮水・小山・相原・片倉・打越の六カ村に集中し、鍮水には



▲ 黒船来航の瓦版



▲ 積込風景



▲ ベアト撮影の鍮水

十八人もいました。この商人たちは安政六年に始まった生糸の貿易で外国人と取引をする売込商人に対し、産地から買い集めてくる荷主商人の役割を果たしていくことになりました。この荷主商人が八王子から横浜まで生糸を運んだ道が横往還、後の浜街道でした。

シルクロード

シルクロードといえば、中国から中近東を通る道が大変有名です。キタロウのシンセイザイザで作曲されたシルクロードをよく聞いたものです。日本にもシルクロードと呼ばれる道があります。東京にもあるのです。さすが日本国内のことですから、シルクロードとはいわずに、絹の道といいますが、「絹の道」とい

う名前は、昭和二十年代に地元の郷土史家橋本義夫氏に命名されたものです。昭和三十三年に「絹の道」の石碑が建てられました。この道は「浜街道」というのが正式な名称です。

浜街道

浜街道の起点は、今の八王子市八日町の交差点で文化三年（一八〇六）頃は、高札が出されるほどの重要な地点でした。

ここを南に下ると、寺町・万町を通り、黄金橋をわたり八王子医療刑務所の脇を通って子安坂上にでます。この道筋は国道十六号ですので、今は面影がありません。このままいくと京王線片倉駅の近くのガードをくぐり片倉交差点を通り、慈眼寺の門前を通り鑓水に至りますが、慈眼寺から先は大規模



▲ 浜街道

な宅地開発により道筋は途絶えてしまっています。この後、大塚山公園から浜街道は再び判るようになります。

私たちはこの大塚山公園までを反対方向から歩いてみることにしました。

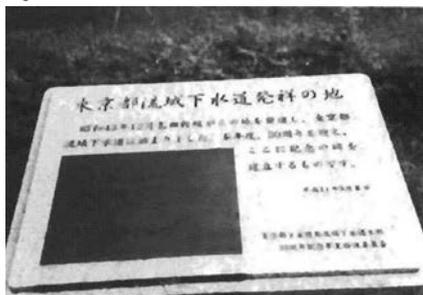
南多摩処理場

南武線が府中本町駅を過ぎ多摩川の鉄橋を渡りますと、多摩川とつかず離れずに並んでいる多摩丘陵が急に迫ってきます。丘陵の山すそを多摩川の流れが洗っているといった風情です。南多摩駅で下り、緩やかな上り道（川崎街道）を歩くこと十数分、南多摩処理場の正門に着きます。この処理場は丘陵を切り開いて建設された関係で、敷地は何段階かの段状に整地されており、見上げるような小山も残っています。この高台に造られた鉄塔の上に、東京アメッシュの球形の降雨レーダがついています。本館手前の植え込みに「東京都流域下水道発祥の地」の碑があり、昭和四十三年十二月にこの敷地から



▲ 南多摩処理場

乞田幹線の掘削を推進したが、これをもって東京都の流域下水道の開始とする旨のことが記されていました。場の近くは、山岳トンネル方式での掘削であり、崩壊しやすい稲城砂層を掘り抜くのはたいへんな難工事であったとのこと。南多摩処理場は、多摩ニュータウンの建設



▲ 東京都流域下水道発祥の地の記念碑



▲ 稲城レーダー基地

と歩調を合わせて建設され（運転開始昭和四十六年三月）、現在は多摩ニュータウンのほか周辺の都市（多摩、稲城、八王子、町田、日野）の汚水を処理しています。現在の処理能力は約十八万立方メートルで、平成十三年より嫌気・無酸素・好気法を取り入れた窒素、リンをも除去できる新しい処理施設が一部稼動しています。

今回の探訪は、図らずも、南多摩処理場から発進して最後に到達した、乞田幹線の最上流にある八王子市の鍮水地区（大栗川の水源）からスタートすることになりました。

絹の道を歩く

京王線南大沢駅を降りて北西に歩くと、歩道専用道路を歩きます。柚木地区を超えると、もう鍮水の地区です。柚木街道近くに入母屋造りの小泉屋敷があります。母屋は、明治十一年に建てられたもので、昭和四十七年に、母屋や裏山を含めて東京都の文化財に指定されました。現在も人が住んでいるため中は非公開ですが、私が干葉に住んでいた小学校時代に、隣の家がこのような茅葺き屋根の家で、蚕を飼っており（養蚕）、二階、三階部分は蚕棚となっていました。小泉家もそのような家でとても懐かしく感じました。

屋敷を左手に出て真っ直ぐいくと（後で、この道が浜街道と判りました）大栗川にでます。嫁入橋を渡り左手にいくと、御殿橋があります。橋のたもとに慶応元年（一八六五）に建立された八王子道標があります。この道標は、元は旧鍮水公会堂付近にあったもので、昭和六十三年の大栗



▲ 蚕棚



▲ 小泉家

川改修工事の時に、現在のところに移築されました。ここから鍮水峠まで登り坂で、昭和四十七年に八王子市の史跡として指定され「絹の道」となります。



▲ 八王子道標

絹の道資料館

三百メートルほどいくと絹の道資料館があります。ここは、元は、鍮水商人「八木下要右衛門」の屋敷跡で安政年間（一八五四〜六〇）にオランダ商人接待用に建てられた木造二階建てで螺旋階段を持った洋風建築でした。鍮水商人は、明治四十一年に横浜・八王子間に鉄道が敷かれるとだんだん没落していきました。その後、「八木下要右衛門」の屋敷は鍮水小学校の教員室や青年館として使われていましたが老朽化したため昭和五十年に取り壊され、平成二年に絹の道資料館として復活しました。



▲ 八木下要右衛門屋敷跡（昭和 55 年）



▲ 絹の道資料館



▲ 嫁入橋からみた大栗川

歴史の道百選



▲ 分岐点

ここを出て北に百メートルほど行きますと、絹の道への分岐点があります。



▲ 絹の道

分岐点には、道の改修工事で集められた石塔や石仏がいくつも見ることができません。

右手に歩き始めますと、十メートルもいかないうちに舗装はなくなり、土の道となります。それは、三十数年タイムスリップをしたようです。ここから峠までは、平成八年に文化庁の選定する「歴史の道百選」に選ばれています。最初は緩やかな登り坂でしたが、歩くうちに息が切れるほどの坂になってきました。神奈川県史に「道路嶮峠ニテ人力車ノ往来モ出来兼候」と書かれるだけがありました。峠の手前に水道局の給水塔がそびえていました。

峠に着くとそこには「絹の道」の石碑があり、「道了堂跡」は大塚山公園となっています。



▲ 絹の道道標

道了堂

明治四十四年刊行の八王子案内の近郊の名所旧跡や、大正十二年発行の南多摩郡史にも載っていたようですが、道了堂は明治六年鎌水永泉寺の別院として生系商人の協力を得て、浅草花川戸から堂宇を移築し創建されたもので、参詣人で賑わっていたようです。戦後は無住となり荒れ放題となっていました。昭和五十八年に解体され本堂の礎石はそのまま残され、平成二年に大塚山公園となりました。ここには国土地理院の二等三角点標石が埋まっており二百十三・五メートルです。

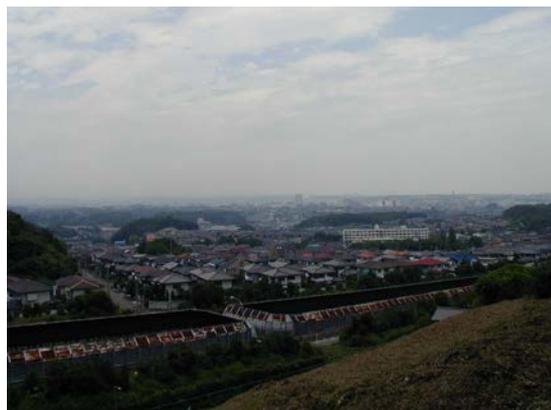
この峠を越えると急に見晴らしが良くなり、片倉の町が見えます。しかし、絹の道はここで途切れてしまい急な階段を下りると国道十六号にぶつかります。



▲ 三角点

片倉製糸

私たちは、片倉製糸という工場があったことは判っていましたが、どこにあるのかは知りませんでした。片倉の町で地元の人に片倉製糸ことを聞いてみましたが、誰も知りません。最後の手段として、八王子の情報を集める必要もあつたので郷土資料館に出向いたところ、なんとということでしょう、臨



▲ 片倉の街



▲ 堂了道跡

時休業ではありませんか。いつもなら諦めてしまおうところですが、途中から

同行した栗田氏が交渉してくれました。結果はOKとのことで、中に案内された学芸員の新藤康夫氏に、千人同心のことやら宿場町のことなど色々お伺いすることが出来ました。新藤さん、無理なお願ひしてすいませんでした。貴重な資料も手に入れることが出来ました。最後に片倉製糸のことを伺ってみました。片倉とは正反対の中野上町にあることが判りました。

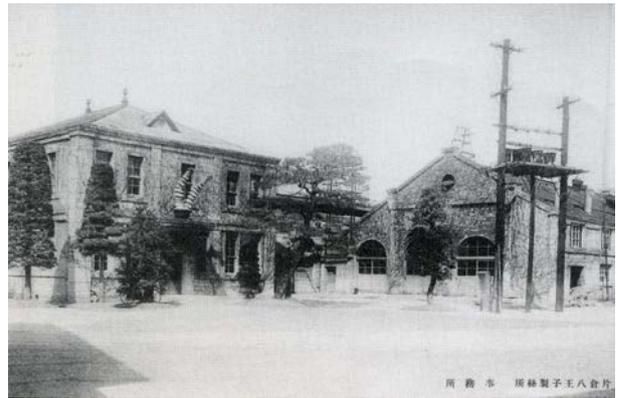
時間は十六時を回っていました。中野上町の日本機械工業株式会社が、探していた片倉製糸の跡であることが判りました。跡地だけでもみる事が出来ればと思ひ総務課を訪ねたところ、丁寧に案内された総務課長の向恒雄氏が説明までしてくださいました。

現在は消防自動車を作る工場です。一台一台手作りしており、同じものはないとのことでした。

歴史を紐解くと、日本機械工業株式会社は大正二年に「ジョイント商会」として消防用の継手を作る会社から始まり、昭和十一年に現在の会社名に変更し、横浜の鶴見で消防ポンプ自動車の製造を開始し、昭和十八年に八王子中野町（中野上町）に新工場を造りました。



▲現在の日本機器事務所



▲片倉製糸（昭和10年頃）

た。片倉製糸とは系列会社であったとのこと。工場は、現在もその当時の建物の大部分が使われているそうです。皆さんもよくご存じでしょうけれど「キャロン」というブランドがありましたね。これも系列会社です。

片倉製糸は、明治六年に長野県諏訪郡川岸村（現岡谷市）で、十人取りの座繰り（ざぐり）製糸を開始したのを皮切りに、明治二十八年に片倉組・大正九年に片倉製糸紡績株式会社と名を変え大きくなり、昭和十四年には明治五年に造られた元

官営の富岡製糸所を合併し、現在は資本金十七億五千万円の片倉工業株式会社となっております。その様な訳で八王子の片倉とは何の関係もないことが判りました。

八王子の片倉製糸の前身は、明治十年に萩原彦七、田代平兵衛らが製糸場を元本郷町（現・八王子中野上町）に建設しました。今も名が残っている萩原橋は、浅川をわたる秋川街道にみんなで橋を架けようとお金を集めたところ、そのお金を持ち逃げされてしまい困っていると、小門宿の製糸商、

萩原彦七が費用一万三千元（当時）のほとんどを出してくれたので、明治三十三年に完成しました（現在より二百メートルほど上流につくられた木造の橋です）。橋は東京府に寄進されたました。萩原彦七の工場は明治三十三年



▲座繰機



▲納車前の消防自動車

年に生糸の大恐慌で打撃を受けたため、明治三十四年に後の片倉製糸に買取されました。

座繰り製糸で造られた生糸は、西欧に比べると製造技術が未熟だったため、外国商人から粗悪品との非難の声がかかるようになりました。時の政府は、品質改良と生産力アップのため機械式製糸を奨励するようになりました。萩原製糸はその先駆者といえます。

八王子の織物は、大正十三年、洋風化時代を迎え、シルク紋織ネクタイを開発して世に出しました。八王子織物は「多摩織」の統一名称で昭和五十五年に通商産業省から、続いて昭和五十七年には東京都から伝統工芸品の指定を受け、機織職人の伝統技術を守りながら今でも織られ続けているようです。

(文責 小松)

参考資料

- 「浜街道」東京都教育委員会
- 「セピア色の風景」八王子市郷土資料館
- 「多摩の街道」(下) けやき出版
- 「江戸東京年表」小学館
- 「F・ベアト幕末写真集」横浜開港資料館
- 「多摩の鉄道百年」日本経済評論社
- 「黒船の時代」河出書房新社
- 「農民生活史事典」柏書房
- 「わが町の歴史八王子」文一総合出版
- 「地図でみる多摩の変遷」日本地図センター